# 読んだ読んだ「益工産」読み取りの足跡

六組　二場面

主人公は、父とえびフライのために、まずい荏胡麻を口に入れた。せっかく釣った魚が逃げそうで、河鹿のことも忘れ、ついどなってしまった。　江畑さん

主人公は、いつもはどならない優しい性格だけど、えびフライのことがうれしく、そのことばかり考えていたので、河鹿のことは何も考えず、思わずどなってしまった。　竹中君

主人公は、父親が久々に帰ってくることや、とびきりうまいと思われるえびフライのことなどで興奮してしまい、気を遣っていた河鹿にどなってしまった。　久保田君

主人公は、見たこともないえびフライが食べられることがとてもうれしかったし、久しぶりによく肥えた雑魚が捕れて、とても興奮していて、どなってしまった。　織田君

主人公は、父親が帰ってくるのはうれしかったけど、えびフライもすごく楽しみにしていた。父親が好きな生そばのだしを作るために釣った魚がぴちぴちとはね、小石で作った柵を越えそうになるから、思わず、「ばだめぐなじゃ、こりゃあ」とどなってしまった。　速水将仁くん

主人公は、えびフライのことで頭がいっぱいで、最初は、河鹿のことを気遣っていたけど、早くえびフライが食べたくて、どういう味なのかを知りたくて、河鹿のことなんて頭になくて、どなってしまった。　近藤さん

主人公は、「えびフライ」がどんな物か分からず、気になってしょうがない。えびフライの想像をしていると興奮していき、ばたばたしている雑魚を見ると気持ちがもっと高ぶっていき、あふれ出たときに、思わず河鹿をどなってしまった。　杉山さん

主人公は、父からの手紙を見て、姉や祖母にえびフライはどんなものか聞いたが、あやふやな返答で分からなかった。ただ、父親が持って帰ってくるほどのものなので、おいしいと思い、「えびフライ」とずっとつぶやかずにいられなかった。そんな中、釣りをしていると、よく肥えた雑魚たちがたくさん釣れたため、思わず「ばだめぐなじゃ、こりゃあ」とどなってしまった。　堀さん